

# イエスは一人の子どもの手を取って

マルコ 9 : 36



司祭 ヨハネ 井田 泉

2015年9月20日  
聖霊降臨後第17主日

奈良基督教会にて

今日の福音書には幼子が出て来ました。

「一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、『途中で何を議論していたのか』とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。『いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。』

そして、一人の子どもの手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。『わたしの名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。』」マルコ 9:33-37

今日はこの説教の後、幼子の祝福と幼子の洗礼を行います。今日の福音書に幼子のことが出て来たのは偶然の一致ですが、神さまの深い計らいかもしれません。

今日の箇所ではイエスさまは、幼子を通して何か大事なことを弟子たちに教えておられるのですが、しかし今日はその教えを考えるとというよりも、このときイエスさまが幼子に何をなさったかを見つめてみることにしましょう。

まずイエスは「一人の子どもの手を取って」

「手を取って」と訳されていますが、原文には「手」という言葉はありません。

イエスは子どもを受け取られた、受け入れられた。無条件でイエスはその幼子の全部を受け入れられたのです。

第二に、「(幼子を) **彼らの真ん中に立たせ**」られました。

イエスさまの優しい手が、愛の手が幼子を支えています。イエスが幼子を皆の真ん中に立たせられたので、皆は幼子を囲んで幼子を見えています。

ここで人々にはどういう気持ちが起こっているのでしょうか。イエスの幼子に対する愛が皆に伝わってきて、温かい、やさしい思いが満ちています。自分たちの間にある、頑なな思い、争いやすい思い、高慢な思いが恥ずかしくなります。この子を守らなければ、この子の内に神さまへの信仰が育ってほしいと願います。

第三に、イエスは幼子を「**抱き上げ**」られます。抱き上げられた幼子は、イエスさまのみ手の中に、腕の中に守られています。自分の力でがんばっているのではなく、主イエスの腕に自分をゆだねているのです。

ああ、かつてはわたしたちもそうでした。大人に、親に自分をゆだねていたのです。けれどもわたしたちは成長して、大きくなって、あらゆることを自分で判断し、自分でしなければならなくなりました。むつかしいこと、辛いことに次々に直面して、孤独で、何の支えもないかのような重い気持ちにしばしばとらわれます。

けれども実は違うのではないか。実はわたしたちも、今も、神さまによって招かれ、受けいれられ、愛され、支えられているのです。イエスさまの腕の中で支えられているのです。

主イエスのみ手の中に支えられ、守られているのであれば、わたしたちは安心して考え、安心して決断し、安心して実行できます。

このとき、幼子を囲んでいた弟子たちはそのことを知ったのではないのでしょうか。

祈りましょう。

主イエスさま、幼子を祝福し、今もこれからも守り支え導いてください。大人になったわたしたちも、あなたの子どもとして祝福し、守り支え導いてください。アーメン